篠田久治郎録
鹿兒島戰爭記
九編

A430
6比

鹿児島戦爭記九編

東京　篠田仙果編

茲に豊後の國大分縣
十の暴動に出
来る

中津の賊魁
増田宋太郎

の増田宋太郎
後藤純平等
巨魁となり兵隊の
兵法に百人程と
暴動し二月二十一日
合図の狼煙を敵に

▲喇叭を吹らて中津の市廛に切
入て富豪の家宅を毀害し

48-7875

鹿児島戦爭記

九編

東京　篠田仙果編

東京　舍清祝画

三戔五厘

玉ぐすり小繞
奪ひとり
火をたきたてく
支庵を燒支ちり
田氣の祇夫妻○逢
手隈○小犬丸の
ひこをかつめ紅稿
を切あとし皮剪
又ハ藝家がつ宅の
宅一切り入獄屋を破りて
花人を出し
人歩とーて

法拍を
たちまち別府
の烟家屋未
水濱の元底屋同所の奥座
来をたちまち高家一あ一入
法使一救方の金子をうむひとり
ちまちの中津の四條大手の門対ふ
あ人ぎり列をこ一声ふ鎌波をつた
中津の町ゝ法礼を豊後の
城使と一ト手にもう大分鎌庵を
襲ひ麻黒湾鷲ふ組せんと
四月一日四日市通り海岸通りと

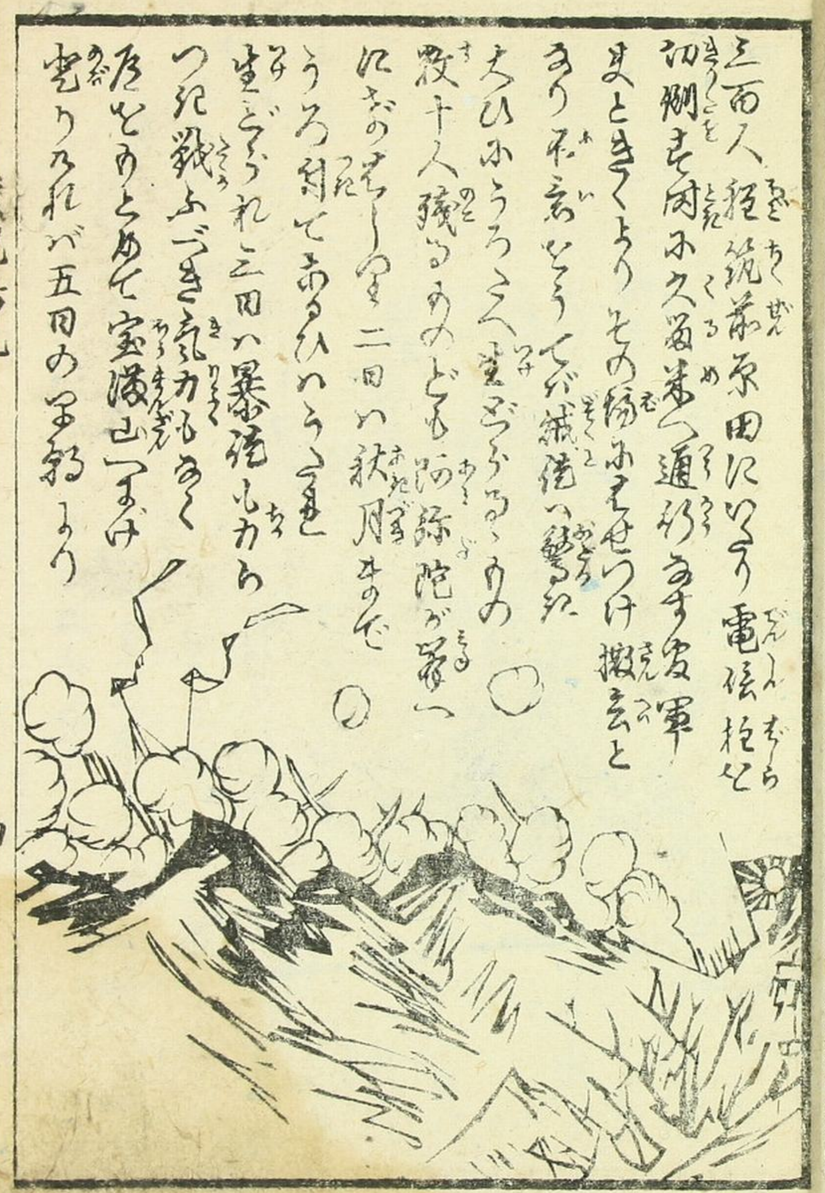
○さて又福島縣
士族藤野彦四
郎。村上彦十
郎。久世芳宮
国。久見熊。
等三名藤野彦
四郎士族と
五百余人うち
かゝりし日線
下。七隈村へ
屯集す
り下の

軍あれバソレ対ちうと
急速ふ去を立て出し三月
三十日の夕ぐ夜の明ざるふ
昭石谷村まで出張すに
異徒ハ日所の陣へ陣し
応戦ありしなるに官軍ハ
ざれハ忽ちふ敗走ありし三十一日曲渕
駄田等よりふたゝび戦ひ久世芳
宮。下川宮吾ハ対死し異徒ハ
ちりく〳〵ちりく〳〵ふ新世陣へ引あげ
るとは当を。ぬるさぬ対て紀を
皮軍ハ追ひ〳〵く紀を追ふ

これ
ふ
ろ
て江上に
出ずれ
六十名ほど
討死しむらと
雑十人ほどの
てよろこび
めとり
久元年
名も生ぐら出る四月一日

○福岡縣の
暴徒等
宝満山に
敗滅す

三百人程筑前原田に
河側を
まとき
あり
大ひふろ
殺十人
江おの
うろ
生ぐら
つ紀戦
乙とあて
出りれば五日の



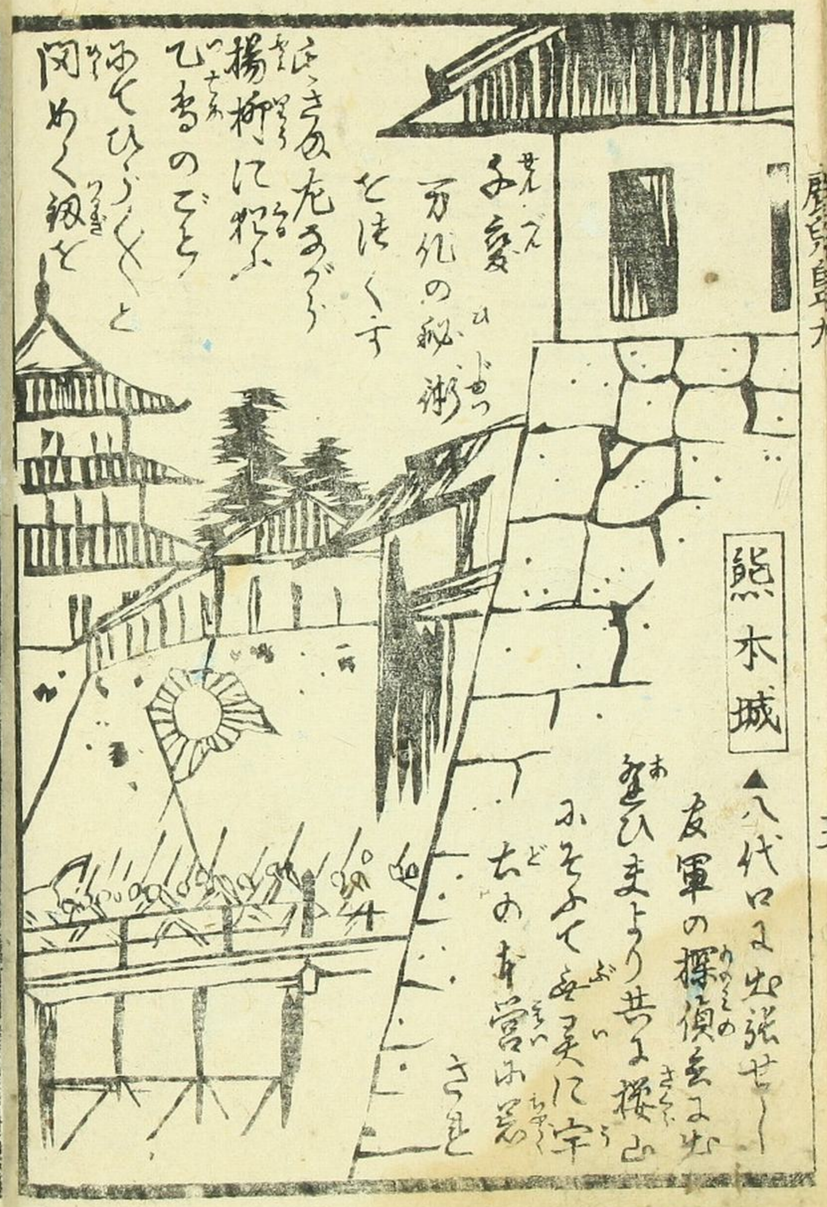
▲白ぬのの鉢巻をしめ
鉄ぢりめんの
たすきをかけ
▲中津藩士
安藤下の城に
籠城の図

宝蔵山とさゝげ
たれど城一人も
ひるえざりしが
進ひく
角弥が
あらびに
ちをを
▲

ふせ
加ゝる
と
そこに
さて
寝ひる
まに
の
抜刀
うち
ふり
☒

○本の墓所へ
ゝり出せ
皮軍方の抜刀隊に業を達せ
巡査あれば暴徒が業たる
之の墨塚へドッと喰いて
加入ゆゑ勢ひ猛虎の
ごとく強き抜刀の鹿四
海勢もふぐべ
多之をひあひ
ぐれ之をあを
しも暴徒の中ゝり
年の比二十一二とゝゆる
婦人とゝりの髪をゝりきゝ

☒抜刀隊の
ゝり出せ右を
うち左をきゝ



熊本城

▲八代口より出張せし
友軍の探偵兵より出
あひまよう共よ探ら
ふそふて兵に宇
古の本営ハ
さ見

あとを殿軍の
奥少佐い義仲の
妻巴ゐ武ハ板額所の
為ホが再来とそそ疑られぬ
○同ホ日八日熊本に繞城せし
奥陸軍少佐い一大隊の勇兵を
率ゐ城門を押ふきとゝと計り
ホ採出し殺の間橋より通り町へ出
遮る暴徒どうち破り安政橋の
川上をとゝり中牟田村より古ヶ村と
経て紅葉ホ出みどり川歩ゝ
ゐ隈の庄へ到りしにそうよく▲

参軍方へ然る城中の別府秋圓
ゆどもとつふさふ潰舌ゐぬ
今日途中にて暴徒十二
名を生捕りが然る
会へ死傷三名あり

○茲ふ東京なる
武丁目ふ家留の
薩兒倍練士族江夏
千惣同人弟亜方麻布
長坂の伯別府秋圓
が所撲川町ゑ

止宿の廻政徒
赤坂溜池ゑ
伯板橋盤与
留ひろに
逃げを止て
西ゆふ人を通ゞ四月十二日
上彈公雷をあて死ぬふ
ゆゝの巴案会あさんと
江戸千惣板橋盤与い
山下の居鍋ゆて一盃を
飲ろゝ終りの若い上野ゑ
死をすゞめ居るところへ

探索方いまをまつ
同じく荒くれの者ゆ
拵立宣嘩を仕かけ
巡査来りて双方とも
屯所へひき宣嘩の仕形と
味とをよみおきてうつて無効の
綱へ逆縛どもに夫ひふ
あどろくれば肝ふ
及びわれば

▲

☒暴動ふ出会ひ
一味せよとあり
くれべかーと
まうぬと

◑

◑牛鍋
ふあくびに同
仕ぬ角力ふ
かさねー壁と
自にりふ暴
徒がちくく
胸ふけと云

▲

板橋ゆ
女の者人とも
召捕り
○故又信義の角力年
寄仲素と言る若い数者の
角力をめーと連て西国筋と
奥州くー廉児湾ふいくり
角力興業いく今ちち学校生徒の☒

◎

古俵ど

つれ出ど
いろくかと
ここせーとど
○ふくくび
ちく八代ふ彼
考る湾ふ羽八

別働隊あらびに福島大坂能古会と
引率し暴徒が後を絶べ〜とせへる
敵を打たひ日京久
八代。境町。宍の京
あて激戦あり終に
宰去に攻入て因所
小全く攻落さ
極木
の
軍い小社山
上の
吉治浜木谷村の

三浦少将

宮の方なる
要害堅
固と
高島少将

なる三の嶽をとり
きつて木谷町の老りの
方より攻込を麻見信
が子の樊也し和を
中絶たふ口滴水
より大砲あて
を田舞の敵を
うちたつうう

こゝて門尻の中味なる
熱情梁瓶々隆盛い
諸方の味方放棄し死傷
いと多かれば意ふ云と集む
べゝと別府彩助。辺見
十郎太。樺山久兵衛の
三人は命下し

樺山久兵衛

田畠常秋

麻呂侯人場
しめ同線の大出紀度
田畠常秋と後合し
ちかりふ云と集めり

鹿兒島戰爭記九編終

明治十年三月廿三日 印刷
下谷区御徒町二丁目十六番地
大畑吉平 小三郎
同人
同人 藤田人次郎
出版人 杉浦朝次郎

篠田久次郎錄

鬼兒島戰爭記

十編

大友朝次郎

鹿兒島戰爭記

十編

篠田仙果編

方圓舍清狂畫

蕃山堂

三錢五りン

鹿兒島戰爭記十編

東京

篠田仙果記

十余年
樺山久義の
三人の大出紀安田畠
岩秋と志願し金屯紛こゝに夢り
一千五百人四月一日二日三日
の三日に鹿兒島を出發す屯

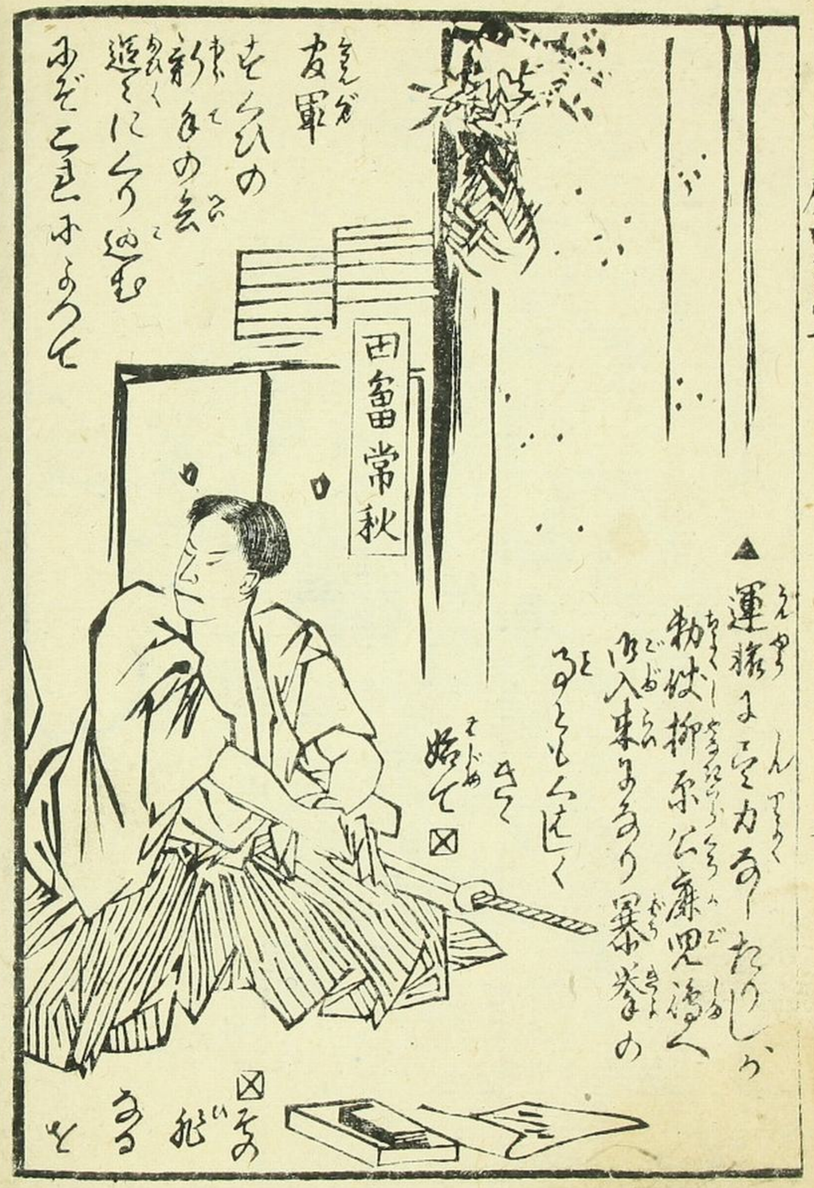
加決木四郎八代
勝盛にくを
国しゞく
六日秋戸川
まで行
迎

樺山久兵衛

◆ 敵軍の
別働隊が背後
◆

☒ 敵い未方に信し
かつ戦場も廣漠
なれば若戦多す
と一下くまぐび
されど一歩も
退ぐべきの
必要と
きして

をらんとあるる
ばぞ言ふ信ぬ
その機をさろ
秋戸川を渡人ふ
めて会士合せて
三大隊をぐり
あーて待ちかしふ
七日の午前八時ごろ
暴徒ゆ山川を
わたり新多の勢ひ
いと激しく安宇も
防禦の術をこせた ☒



▲運搬よ[illegible]物数抑系伝廉兒傳へ
[illegible]入来るあり[illegible]
[illegible]

▲[illegible]廉兒傳の士族桂清四郎
[illegible]

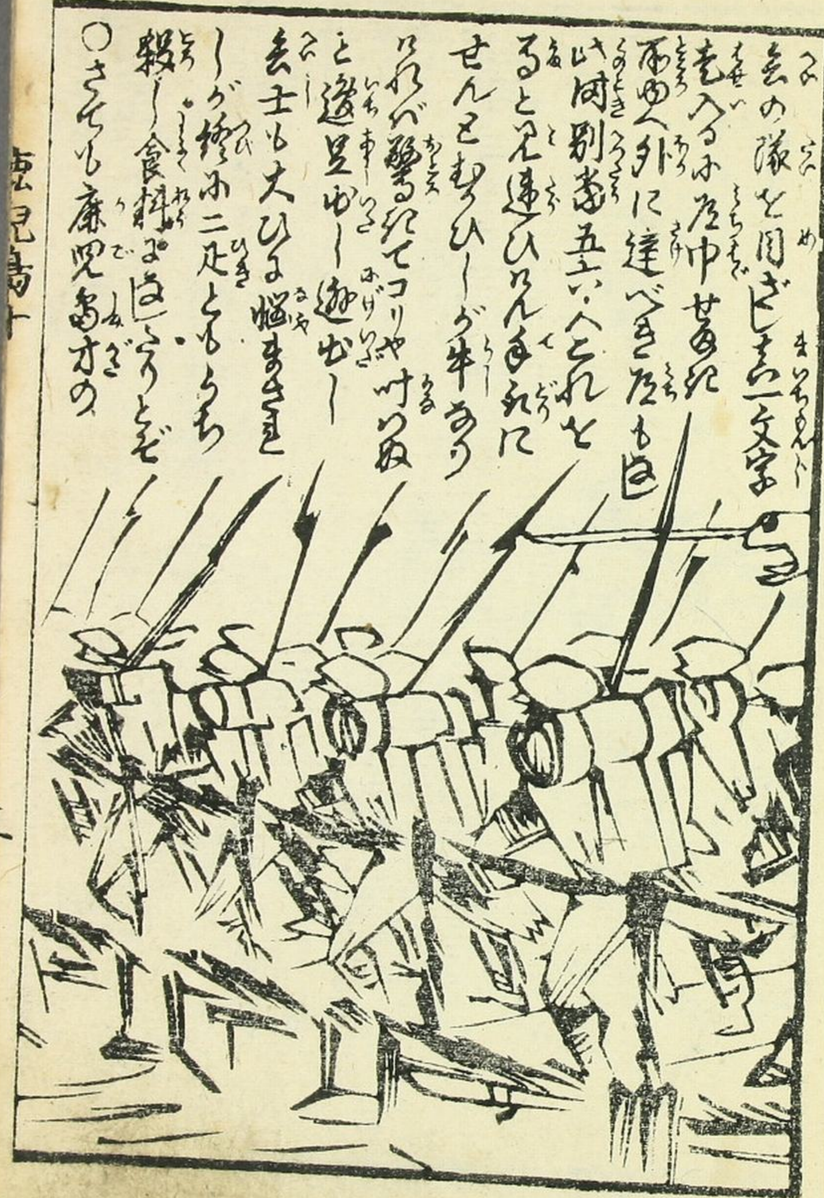
勅使せ〜るめの敵が
ども玄武門々ふ
一来し熊ヶ
出張せ〜が
田畠が刈
脱ときくよう
麻兜猪〜脱線
色彩絲令と
絲し玄と集め
玄精強業を累

▲吉治藏ふせめあせう
麻兜猪ぐるも近傍
玄の赤徒一とする
ようもいぐや
姓旌を決せんと
切所ふ築う
拘強のうち
ようもげ〜く
大ふ砲を
ぶうみ
るふ

徒うと〜送るるとぞ
尤笑ひべき一話ハ此猛四郎が
絲令と号し居るハ
城狐村田彩八より
絲令出を受て始て
絲令と称せ〜よ
徒ち一個の威勢
あてハ絲ヤの老
を警ぶ氏ゆどの
人物ハあふざるべ〜
○茲に江田陸軍が佐ハ
近傍玄二家大藏を率〜

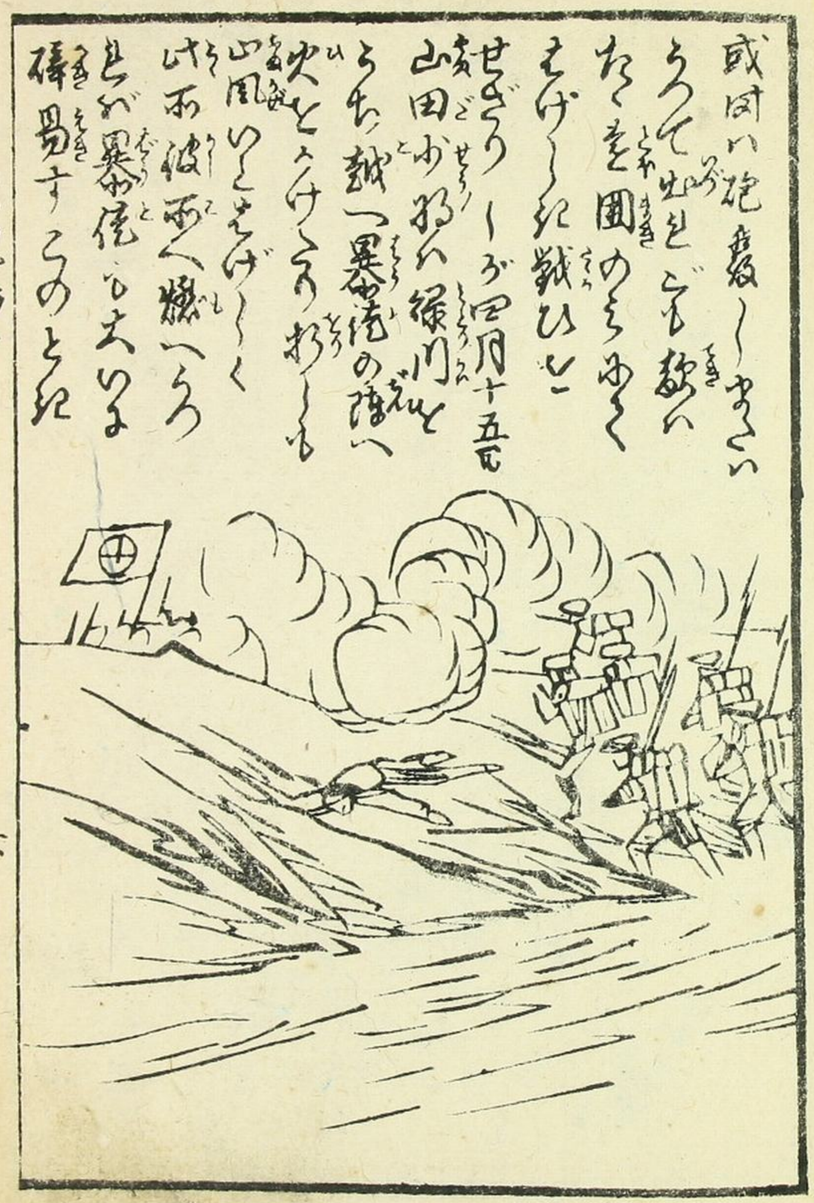
◐皮軍も
いまだ
出ず
あるべく
砲撃
あ沢
ゆど
に

猶放
さらにえさざり
しが暴徒方
より大いなる赤牛
二疋と怒らして
追ひ立て放ちしが
怒牛い角とあり
きく牧ひつて近傍



去の隊を用ゐ[illegible]文字
を入るゝ[illegible]巾せ[illegible]
[illegible]外に達べきたも[illegible]
[illegible]別者五[illegible]
るとゝ達ひ[illegible]れに
せんとゝ[illegible]ひしが半[illegible]
[illegible]ばゝ驚るゝてコリヤ叶ハぬ
と逐[illegible]逃出し
去士も大ひに悩まされ
しが終ゝ二疋とも[illegible]
殺し食料[illegible]
○さても廉児島[illegible]の

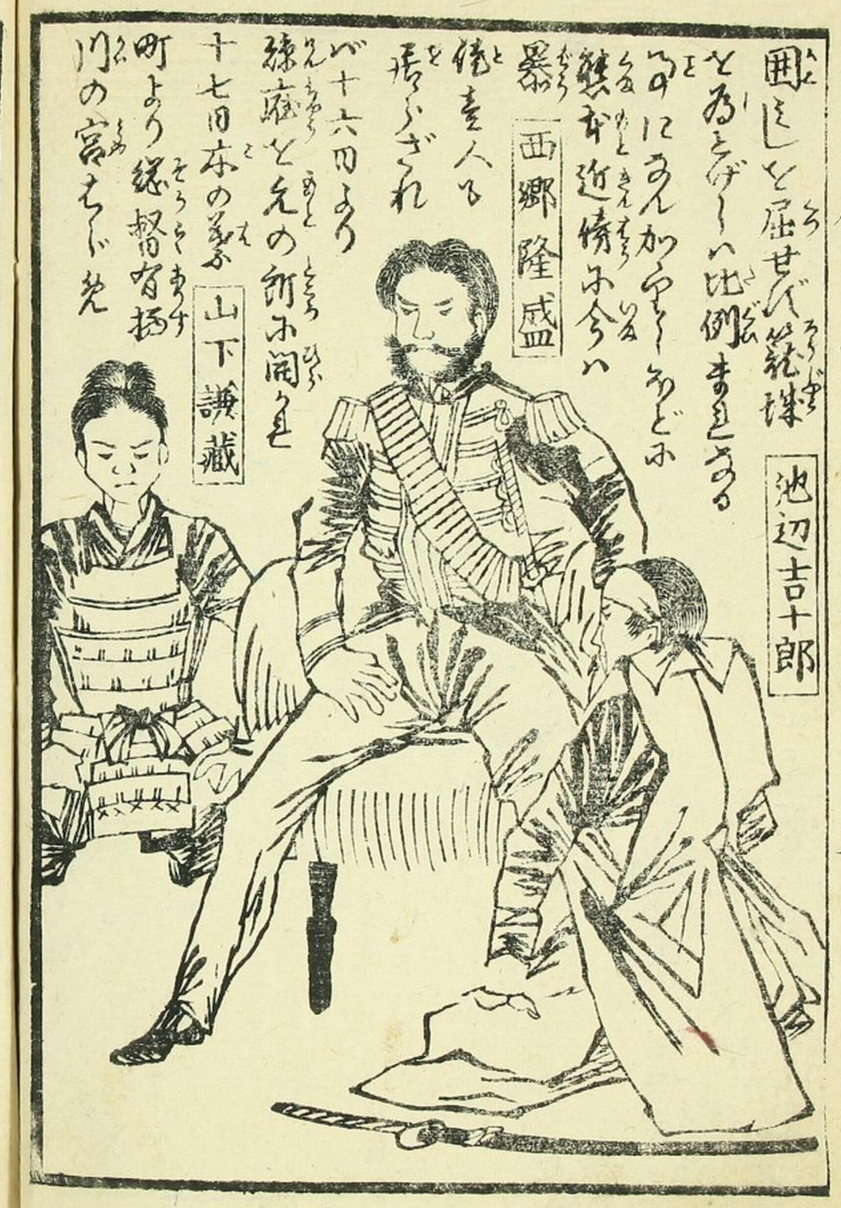
本営と臣る川尻口へい
山田方ゐのまあて川尻
川へ和泉」をかけ想勢
をげしく対をるあ
きすぐの暴徒もあ毛紀
かくの四方をさして
陣をあ上しぐ門路方ゐい
ゆ和泉の数を折りて
ゆうこんゆう
○谷方ゐが絶りる
熊野の傳云ゐ
暴徒ホとさそうと



或問い絶叫しまさい
ゆうて出をど数へ
ゆくを囲のゆうゆく
をげしく戦ひと
せぐうしぐ四月十五日
山田方ゐい紀川を
ゆう越一暴徒の渡へ
火とゆけゆう方しも
山風いとをげしく
ゆ不彼西へ燃へゆう
ゆが暴徒ゆ大いる
傳易すゆうのとゆ

山川中佐は別動隊の中隊を率ひ横合より付てうて敵陣を突てとかりハ潮川をとうて遮ぎる異徒を切ふせ驚き騒ぐ間を能く進をるを媒介あてもまとさうて兜を被ぬ媒を指揮ひその勢ひ猛虎のごとく媒門を突て出ひ

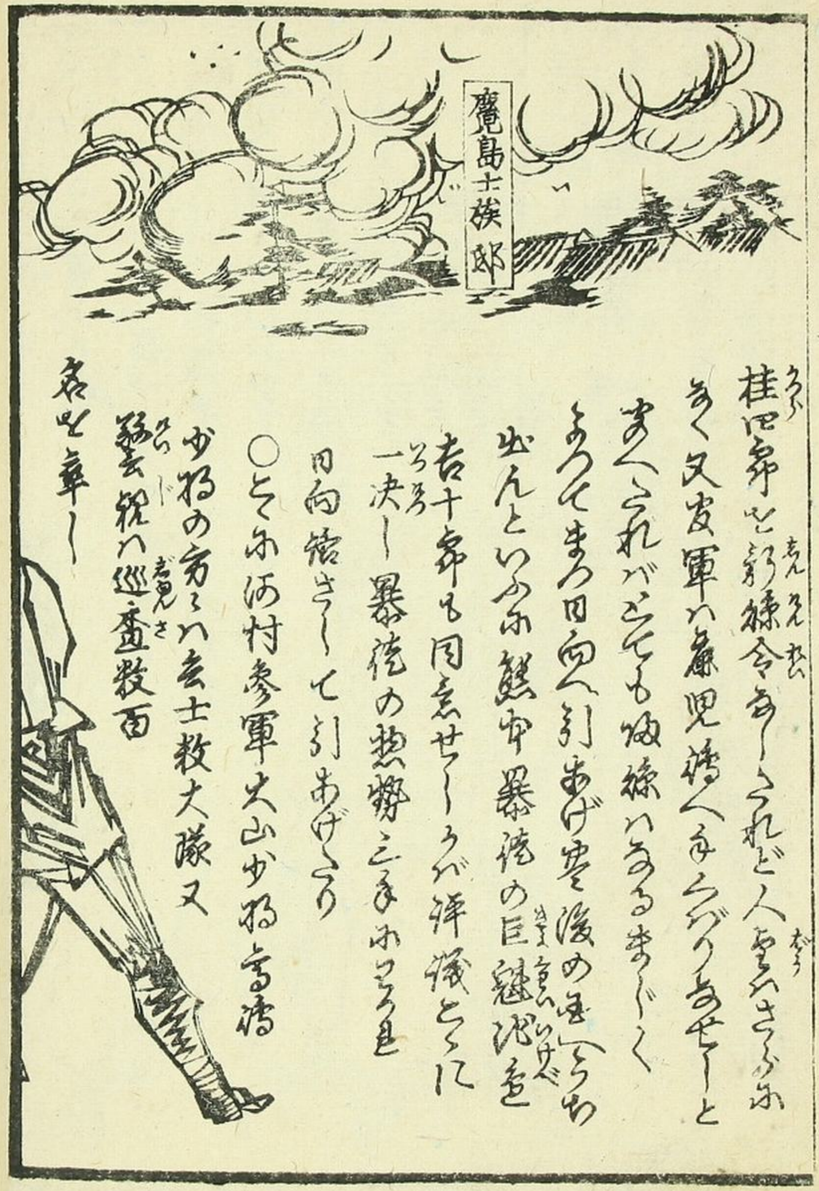
囲を敵を遮ぎる山川中佐は出あひ〳〵ぐ列をなぐし獅子をあげ入媒に及びる傷を勇るる敵さを強る鹿兒島勢が五十余人



開戦と屈せざる統帥
とあるとげしい比例まで
なのにあんかやくそうどう
熊本近情は今ハ
暴徒主人を
張ぶざれ
ば十六日より
熊本と元の所ハ開き
十七日本の
町より総督府
門の宮ちぶ先

参軍方入城
本営と熊本城中
○さそる暴徒の城中ハ熊本
西郷隆盛人ともろそいるハ
熊本城を攻めて援撮
とうさん目的ありしが
城を落さて破り
がくく山鹿の宿
軍連絡し川尻
この戰も破られ
云士も多く損ず先れば一旦
鹿児島にもどる〜と云る

▲いかざるに相所
利秋すぐに出こ鹿児島の
大出死安田鳥雲秋切腹



桂四郎と彩綾令子とこれど人をたさふ
く又皮軍い薩兒港人をこづりあせ
まへこれバこそも姫綾いるまぐく
もつて出ん日向へ引あげ雲渡の
吉十郎も同去せ一こば洋機とこに
一決し暴徒の熱勢こをふこる
日向諸さ一て引あげこり
○とてふ河村参軍火山少将高
少将の方へハ去士族大隊又
鹿兒島士族郎百
名と幸し一

かくて五月三日暴徒薩州湯一ノ瀬に著ると
官軍方は英気を奮ひ
ものすごく攻
寄れとも死り手に付四日夜明
ぬさるを暴徒らは西々隆盛
が徒し武村の方より押
よせ彰上ぎ〳〵と
おりてくり
をこ二をこ二ゐ
進でこ来るを待設る
岩軍は塩山の叶方より
先づ戰ひの邪广多屋安大花を打ぬき
なれば

河村参軍

▲一里余を
延焼〳〵

○暴徒敗軍は次々出

明治十年四月四日出版御届

編輯人　篠田久次郎
第五大區七小区
下谷上野町
十二番地

出版人　杉浦朝次郎
第五大區一小区
浅草茅町一丁目
十六番地

010190510331

大友朝次郎